

「Grands Magasins du Louvre」

文化服装学院非常勤講師（西洋服装史担当） 横田 尚美

本書は、パリ・ルーヴル百貨店（1855-1974年）のカタログの一部である。ちょうど百貨店が大規模小売店としての体裁を整えた時代^(注1)のもので、店舗とその前のにぎわいが描かれた図版も見られ、3つの通りに面していたこともわかる。

カタログには、シーズンごとに、さらに以下のようなアイテムごとに表紙がついている。

各ページの上部に「Grands Magasins du Louvre（ルーヴル百貨店）」と大きな文字で記され（表記はのちに変化）、通常1、2点の図版がある。絵の下部に、イラストレーターや版元のものかと思われる名前やイニシャルが読みとれるページも多い。絵の下に商品番号と生地や色、特徴、値段が記されている。色や素材・デザインのバリエーションによって、値段が複数提示された商品も多い。

その下には、サイズ展開が説明されたり、その他の注意事項が加えられたりしている場合もある（以下、便宜上筆者がNo.を付けた）。

1) 1873-74年冬のモード

①コートと既製服 65点

（図40のページは破かれている）

②クラヴァットとフィシュール（肩掛け）8点

③ドレスとペニョワール（ガウン）31点

④モードとかぶり物 24点

⑤スカートとセミオーダー・ドレス 15点

2) 1875年冬のモード

①コートと既製服 67点

*最後のページには、10体描かれている。

②ドレスと既製品の衣装一揃い 56点

*冒頭には、少年用セーラー服、乳児用洗礼服と、ウェディングドレス2点が掲載されている。

③スカートとセミオーダー・ドレス 44点

④モードとかぶり物 20点

*ほとんどの帽子が、鳥の剥製で装飾されている。

3) 1876-77冬シーズン

表紙のタイトルの下に「世界で最も広いルーヴル百貨店」と添書きされ、次にシーズンの記された口絵、その後に全体を概観するようなカタログ①と続く。口絵とそのカタログの図版の一部は②以降のカタログにも見られ、版が共用されていることがわかる。両面印刷となり、百貨店名は絵の横にも小さく入れられるようになった。

①-1 コートと既製服 32点

①-2 既製品の衣装一揃いとペニョワール 8点

①-3 モードとかぶり物 4点

①-4 既製品のスカートとペチコート 32点

②コートと既製服 108点

GRANDS MAGASINS DU LOUVRE



2) ②の図版。合本の冒頭にも反転した図版が使われている。風船は、子供向けの土産だろう。

- ③既製品の衣装一揃いとペニョワール 21点
- ④モードとかぶり物 32点
- ⑤既製品のスカートとペチコート 59点
 - * 1 ページに 4 点ほど紹介されている。基本の色は、ほぼ黒だけである。①-4 も同様。
- ⑥ドレスとセミオーダー・チュニック（丈の長い上衣） 12点 *最後の 3 点は、子供服。
- ⑦トゥルニール（スカートの形をつくる下着）とコルセット 6点
- ⑧クラヴァットとフィシュール 52点
 - *男性用クラヴァットを含む。

百貨店では、早くから通信販売も活発に行われていたようだ^(注2)。それだけでなくカタログは宣伝にもなり、百貨店に足を運ぶことができる客にも便利だったに違いない。

なぜ冬号ばかりなのか。当時の百貨店の商売は、秋冬物の販売に重点が置かれていたらしい。この頃「イリュストラシオン」紙に掲載された広告の研究によれば^(注3)、ルーヴル百貨店の広告は 3 月と 9、10、12 月に集中している。10 月上旬に冬のモード（流行）の大売り出しが行われていたこともわかる。それらを考え合わせると、カタログが全シーズン作られていなかった可能性、作られていたとしてもシーズンによってその充実度が違っていった可能性がある。

また女性用既製の始まりはコート類からといわれている。実際、どの年もカタログは「コートと既製服」から始まっている。当時の服は上半身がフィットしているので、既製服でリーズナブルに実現するのは難しい。これもコート類が多用される冬物カタログだけが合本されている理由かもしれない。もちろん当初のカタログの持ち主が、もっとも関心の高いカタログだけを保存した可能性もある。けれど、冬物だけが合本されているのは単なる偶然ではないと考えることもできるだろう。

商品の値段には、大層な幅がある。一つのカタログで最も商品数の多いのは、3) ②だ。最も安いジャケットで 28 フラン、最も高い「とても贅沢なコート」は 480 フランとなっている。

一方、アイテムによっては値段に偏りのある場

合もある。3) ⑤では、スカート 55 点中、59 フランのものが 9 点、78 フランが 8 点、39 フランが 5 点で、人気のある価格帯も想像できる。

ほかにも、ここには書ききれないいくつかの発見があるが、一つだけ紹介したい。カタログには、「パリ-ルーヴル」や「カシュミール=ドール」、「キュークロス」といったオリジナル生地が使用された商品が、多々確認できる。エミール・ゾラが同時代の百貨店の姿を『ボヌール・デ・ダム百貨店』（1883 年）^(注4) に著した。その中には、オリジナル絹織物「パリ-ボヌール」と「キューール=ドール」が登場する。ゾラは小説の構想の多くをボン=マルシェから得たというが、少なくとも布の名前はルーヴル百貨店の布をもじったのではないかという推測が成り立つのである。

*本書の請求記号〈KE01/383.135/G〉

(注 1) 松原建彦「19 世紀後半のパリにおけるデパート経営—『イリュストラシオン』紙上の広告分析を中心に—」（福岡大学経済学論叢、第 52 巻第 3-4 号、2008 年 3 月）P.463-465

(注 2) フィリップ・ペロー（大矢タカヤス訳）『衣服のアルケオロジー』（文化出版局、1985 年）P.112 〈383.1/P〉

(注 3) 松原 前掲書 P.473、483

(注 4) エミール・ゾラ（伊藤桂子訳）『ボヌール・デ・ダム百貨店』（論創社、2002 年）〈953.6/Z〉



図版右の 431 番は、「パリ-ルーヴル」製が 195 フラン、「キュークロス」製が 290 フランである。